たった一言

冬桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
たった一言

【Ｎコード】
Ｎ３８３７Ｌ

【作者名】
冬桜

【あらすじ】
一言を言えなかったお話です。

小さな小さな鈴が一つ。もう鳴らない鈴だけど、今も大切にしまってある。

小さい頃は体が弱くてよく体調をくずしてた。ちょっとした風邪でも、苦しくてしんどくて、その度に病院へ行っていた。あの人とはそこで出会った。背の高い優しそうなお姉さんで、いつも私のことを心配してくれていた。

いつしか、病気でもないのにお姉さんに会いに病院に行っていた。いつもいつも笑って出迎えてくれるお姉さん。遊びに行くたびにお話を聞かしてくれたり、折り紙を折ってくれた。犬や猫、鶴も何度も折ってくれた。いろんな動物が四角い紙から生まれてくる。それが楽しみで病院に毎日のように通ってた。

その日はちょっと落ち込んでいたときだった。家で飼っていた猫がいなくなったってしまった。いつもは日が暮れる頃には戻ってくるはずだったけど、昨日は戻ってこなかった。一晩中泣き散らかして疲れきって寝てしまった。起きても猫は帰ってこなかった。

「どうしたの？」

落ち込んでいると、お姉さんは心配そうに声をかけてくれる。

「ミーがね。いなくなっちゃったの・・・」

戻らない猫の話をすると、頭をなでて慰めてくれた。

「大丈夫。ちゃんと戻ってくるわ」

そういって元気づけてくれた。いつもならすぐに元気になるのだけれど、その日は元気にはなれなかった。まだ、落ち込んでいる自分を見かねたのか、お姉さんは小さな小さな鈴を取り出して言った。

「この鈴をあげる。これは、私の一番の宝物なの」

手の中で転がる鈴は小さな声で鳴いた。

「この鈴を持っていれば願いが叶うから」
「これを持ってればミーは帰ってくる？」
「もちろん。だから元気をだして。笑顔でおかえりを言わないといけないでしょう」
そういって、私の手に鈴を置いてくれた。本当に願いが叶うような気がして、心が軽くなった。
ミーが帰ってきますようにと願いを込めて、その鈴を大切に大切にポッケにしまった。その様子を見たお姉さんは笑顔で言った。
「さあ、今日は何を折って欲しい？」

いつもいつもその鈴を持ち歩いた。学校に行くときも遊びに行くときも病院に行くときも。そして、何日か後に猫は帰ってきた。そのことをお姉さんに報告すると、
「そう、良かったね」
といって、心から喜んでくれた。
それからもその鈴を持っていた。毎日のようにその鈴と一緒にいた。この鈴を持っていると、ずっとお姉さんと一緒にいる気がして、お姉さんの優しさが伝わってくる気がして。たぶん、本当にその鈴にはお姉さんの優しさがたくさん詰まっていたのだと思う。

ある日その鈴をなくしてしまった。家も探したし、学校も探したし、病院も探した。けれど、見つからなかった。お姉さんの一番の宝物を失くしてしまったのが怖くて、それから病院にいかなくなった。何日も過ぎた。その間ずっと苦しくて、でも優しくしてくれるお姉さんは側にいない。その間もずっと探したけど見つからなかった。
辛くて悲しくて、でもお姉さんに会いたくて、謝りに行こうと思った。ごめんなさいって。ちゃんと謝れば許してくれると思ったから。
病院への道のりはすごく遠かった。いつもより長い距離をいつも

より長い時間をかけて歩いていった。病院に着くと、お姉さんの病室に向かった。

病室には誰もいなかった。真っ白い部屋に真っ白いベッド。閉じられた窓に何も入っていない花瓶。

部屋からでると、近くを通りがかった看護師さんに聞いてみた。

「その部屋の患者さんならもう・・・」

最後の言葉を待たずに駆け出した。看護師さんの声が遠く聞こえてくる。もうなにがなんだか分からなくなった。全力で駆けた。辛くて悲しくて悔しくて。

いつしか公園にきていた。よく遊んだ公園。そのベンチに座ってずっと泣いた。公園には誰もいなくて、静かだった。自分の泣き声だけが響いてる。

何もかもが遅すぎた。どんなに泣いてもお姉さんは戻ってこない。どんなに叫んでも過ぎた時間は帰ってこない。

泣き疲れて、目を開けると小さな小さな鈴が目に入った。ようやく見つけた探し物。なんで今まで見つからなかったのか。そっと拾い上げてぎゅっと両手で握り締める。

お姉さんの優しさが心に染み込んでくる。鈴にもう一度だけお願い事をした。一度でいいからお姉さんに会わせて欲しいと。でも、願い事は叶わない。

たった一言伝えたいことがあった。その言葉を何度も何度も鈴を握り締めて心の中でつぶやく。この鈴がきっと伝えてくれるから。

箱に入れてあった鈴を手のひらに乗せる。昔は病弱だった私も今は普通の人と同じ健康体だ。小さな小さな鈴に詰まった優しさが元気をくれたのだと思う。あのときの言葉をもう一度言った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3837l/

たった一言

2011年1月19日00時42分発行